和書門
類 三六六一
號 二二七
函 四
架
冊 一一

内閣文庫
和書
類 三六六一
號 二二
冊 一一
函 二
架 八

内閣文庫

番號	和 36661	
冊數	11 (1)	
函號	210	12

210-12

国立公文書館
National Archives of Japan

内閣文庫

東雅序

天下之聲不過五而五聲之變不可勝窮蓋聲之初出者爲言言雜而相軋則音生焉聖人於是因言以制字因字以寓音然後其言與音一定而不可易已唯我東邦不待文字而能盡言語之變唯彼西竺不假文字而能盡音韻之變其名天下之物通天下之故東邦貴於言語西竺貴於音韻而中土之於文字則兼之矣夫中土西竺始置不論至於我東邦則居萬国之先開聲氣之元其聲單而素其音希而疏譬之色其白者乎纂組黼繡五色異采而白則受譬之味其耳者乎昂飪盤飣五味異和而耳則受之旦故輕重清濁平上

内閣文庫

去入不過四十七轉而天下之言足雖中土蕃國之語我合數言而通之無不可譯者此我東邦所以達五方之言通五方之欲也余友白石源君精於國語其言曰我邦之語未易驟言有會意有轉注有假借或二合三合而聲有緩急有長短有以發語有助語凡如此之類不可槩以一例斷之且我邦自中葉以上常與三韓往来其言多有得於彼者況復近世漢語梵音與蛮人之語往往雜出而並者行者乎今欲通之先論其世考其言之出孰先孰後然後參伍綜核各以其倫則庶乎不謬乎世之好論倭語者不辨古今詳源委乃欲以膚見而臆決之宜其牽合附會而有不通也是歲之春君出其所著東雅二十卷以示余曰吾逼丁酉之災寓居海上數月傍無一書長夏無事乃採倭語而推論之意有所會隨乎集録積日漫漶凡上秋後遷城北宅不復経意久之遠明年夏病中偶見舊稿於殘篋中乃繼而成之爾昔永叔之遷夷陵也無書可覽間取爰書覽之而自謂足以學子文子瞻在儋耳與田夫野老為鬼怪之譚以消孤悶吾何敢自此古人然此書則爰書鬼譚之類也顧其言頗成次第有可觀者亦不忍以覆醬瓿豈曹公所謂雖助者歟吾子盍序之余非素識倭語者然即而觀之見其議論有據商訂得當各有條理井井不亂其於文錯紛糾處最極意搜扶無復餘蘊發揮前人之微旨一洗世俗之陋習該博之學子淹通之

智後世必有知之者豈與所謂災書鬼譚者比哉君其無多讓焉
遂為之序
享保己亥夏四月初八日英賀室直清書

凡例

尓雅てふ書始り釋詁釈言釋訓なとあり東方上世の言本
朝乃正史ともいふへし其のことのハ先儒乃訓釈なとて不偏き
里境代の歌文辞なときも諸家の注解又すくなからす此
書乃偏を要とせる於物名を釋するにあれを倭名類聚抄よ
見へし其よ據りて天地より始て蟲豸之類よいたるまて其名
乃釋をいへる訳を家説よ附けてよむへしいへるものを釈
得おしてその自分明なるものとききれぬ載せることを必とせ
す凡辨僅なる朝の正史毎にとりて釈し其餘ハ之を避て
訓釈り據る所廣く往乃ことすハ相参て洗輩おへきもの

を以て必ずしも不可とせざるべからず

凡物名舊釈をしるすに不可なるものあり

凡

へきなるものあり並に義不備なるもの

詳

その中化の義例を挙げて別釈とすべきものあり

その中に其義を変化し或は其伝乃海

し難きものあり或は所伝多くして其外に名を

古今に言義通用して物に名付ること又如きもの

古今に言義通用して物に名付ること又如きもの

あり乃ち此等の事に従て種々に録して其世代獻つ

へきものなり

凡物乃名に名付るに彼名あるもの其義の相係れる

ものい他を録して名付ること古言乃雅なる後の俗

言となり古言の俗なる後を雅言となるものあり物名亦然り

世書に用ゆるを正として正代に流れ後世に

呼ふ所乃名のごとき其伝を失ふ多歟筆本に類長今

の美言いとりて其物すなわち洋物のわりは書物

に名代釈とるまとうす其名代雅あるも代代に

世書の仮丁両乃要にのり付く海よりて寓して世に流る

へきなり舊用を撰集して筆に通ひて編次すす

宮間に一遍乃わるのこふして較訂に流るべきも

乃なり秋後古代部門外にトにるふもて洋談

をわふるに及ばざる所乃事に変化の世書せり

而況顧予毛髮言行謬誤引多授其〻多〻其業已
以志倦氣疲其〻其大甚多有刪去
而後乃改定焉

東雅

目録

巻之一　天文　歳時
巻之二　地輿
巻之三　地輿　方位
巻之四　神祇　祭祠具
巻之五　人倫
巻之六　宮室
巻之七　器用　度量　樂器　寶貨　布帛
巻之八　器用　冠服　帳帟具

巻之九　器用　耕織　工匠　舟車　粉雪　行旅
巻之十　器用　文具　武器
巻之十一　器用　雜器
巻之十二　飲食
巻之十三　穀蔬
巻之十四　果蓏
巻之十五　草卉
巻之十六　樹竹
巻之十七　禽鳥
巻之十八　畜獸
巻之十九　鱗介
巻之二十　蟲芻

東雅目録　終

東雅

総倫

従後守源君義撰

天下のことをさして古今あるをいふ古今乃ゐるをいふ又其方ゝあり方ゝ乃中よりあのゝ雅ゝ俗ゝあり古ゝとは太古よりいでて其世ゝ乃人乃ゐひしゝ和の流ゝ也今ゝとは世の人はゝゝと古乃時ゝつゝくるを亦若其世ゝ乃ゐりて五方の流ゝ同ゝ
さりゝ世々のゝゝ古も又中古東西南北乃人をこゝろさす其人
は雅なるあるを俗なるゐりて大やうゐなる人のゝふゝ和雅也
いやしゝゐゝ乃ゝ和ハ俗ゝ乃ゝ和ゝなるものゝゝ中古

の仮借なるもの人のいふこゝろはいかゝ其説乃解なる
あり解なるこゝろなるものゝうへ又今を人乃いふこゝろ
古云ふ也〳〵其解釈なるは記紀なるもかゝるもの
あゝめゝしく本邪乃古なる釈注釈云なるは古之今云
云是なる式解なる人をして訓し式釈注とし古人の
乃西方の方能く通ずる事なるを釋解なる人をして訓
云しる式釋云しいふ所の乃なる歌乃なる也一
方乃間しわゆく四方代和なるを訓なるもの新しいふ事いふ
角〳〵なる所方乃なる式は音小今先進去人乃訓釈式
俗なれはりのなるをふのゝ所なるお古記等小古流と釈や其体百系第式し

旧事紀古事記日本紀批氏録古記拾遺

の代〳〵の歌詞と釈や
後乃注ゆゑなるなるお
乃也と推〳〵例に倣ひて其義を求べつゆゑ式解なるこゝろ
とのわるハ後て其後式なるこゝろ世の人のいふ和漢式解なるは
出ハ漢乃方乃ことなるこれ方の乃ゆゑ乃乃大なるもうねみてわるうりれし其一方の間ゆゑ古人の乃古方
乃推伝の云多〳〵なるこゝろ乃つゆゑ一つゆゑ
つゆゑ事なるもなりなれるゆゑなる古を師と云なるわるすゝしてこゝろ其こゝろ解なるこゝろ
其義と釈〳〵なるハ漢伝なるこゝろなるこゝろ
漢土古人の云に毎〳〵なるいにしへなるこゝろ世を倫なるこゝろ事之四事
紀古事紀日本紀等乃なるよりて〳〵ハ古乃後云のなるこゝろ其書
撰述の代乃人なるいふ所なるこゝろ事もれ
と神各人各ゆゑ歌詞乃なるこゝろ古なるいひ解〳〵ゆゑ
代乃人なる所古なる事〳〵ゆゑ〳〵なる所乃人乃ゆゑ

事わ申しまとまりしかるに
ゆゑ以て韓地乃法を本朝より服属せしゆゑ
乃入貢ふ来れるの儀わ彼国より重れし事を
て其政代営れる本朝乃人も多かりしかゆゑ
云わ雖ども事代わ六経の学のみ偏重せるゆゑ
の博士等おの〳〵其学ぶ所りて来りしかゆゑ
漢隷楷の書体と云ひ又ひ亦の古文廢せしむて
さも或ハ其云廢ま或ハ其儀ま倭意ま
せし事の始とてこれより後仏氏乃出ると
梵代乃ことも其教と其ゆゑ行ま其後ゆゑ
ま

ま後宋元代乃方云代りて東国の伝云とるもしも
くるゝ事を世乃ひて西南洋乃番船も伝聞ま
あるまとて梵代乃世ろの流と申しまくハ琉球と
とロクザとひ石行をアンジヤベルト炮架とカンテラとひ鎖鉄をボクシとい方ハ
云代ジバンとて乃類なるもの中琉球と呂宋と毛布と南北綿ま
されいこゆゑ太古乃ゆゑ世ま
云風と者り後と伝ゆゑ者ま
乃方云のこゝさも又わ況ねと云ふ
そのゆゑとして其義乃ゆゑ
ホのこゝさも世乃伝尚乃わ
今のこゝもの義とれまる例代推して古乃何代解

実と其事を合ぬ〳〵こゝにおいてこれを上古自ら上古乃伝
中古自ら中古乃伝あるをもて自ら近古の伝あるをこれより
して後世代遞よりて〳〵おの〳〵其世の伝ありてすなわち我乃
尚ふとゝろ用〳〵そなはるをは古今のをよわ世〳〵なむえ
其世代海をくさ事也しかるに〳〵師匠乃〳〵一つゝ
云しとゝ〳〵事多くは後世伝者乃解釈せ一所のれぬ迷惑をふしくさは古今てハこゝを云
おわしとゝひのいとうさ深き古今の云乃義とあぬふ乃てなれい給ふ事をもまく
なるゝをもて又のゝひしい所年十三乃時より貞徳のいひ〳〵事わるとうり其幼よりかひさい
事のゝのおひそ乃しくさいわゝをもて本のゝのふとつい多くい定徳乃玉のゝ云おれ新きるゝ其
信長秀吉の二代ゝうはくさて天下の事おのゝひしまれをえ又をやくい三河の西の方乃
はゝ事れるなりしこのゝひしゝ代ゝ小しくなりふ貞徳乃幼さ比ひひの系のゝ〳〵し
てゝふゝ西さ西さしゝ〳〵のゝ系乃〳〵ゝゝふゝさすさゝ〳〵乃系のゝ云
ひしゝゝゝのゝふゝわゝゝを足利氏の代のゝし東西乃方云れ西ゝゝゝぬ事をも
はゝゝゝすゝて京乃事其代〳〵の伝尚まゝてゝゝゝふまて事ゝゝゝるゝ
れらの事乃ゝゝゝる所

永しゝ〳〵海かゝゝ人〳〵のゝゝゝゝるゝ愚いて其云代なき
其事と同ひしゝ事ゝもあゝゝゝゝ東方乃云ゝゝ方乃
ゝゝゝゝゝゝ西方の云ゝゝ方音云ゝ方云ゝ中古
海ゝゝ事ゝゝ次〳〵東南乃言を揚ゝゝ東北乃言い海ゝゝ
西北乃方云ゝ東是にわゝゝ其事ゝゝ〳〵ゝ乃事〳〵ゝ方代
ゝゝゝゝ初ゝゝゝゝゝ多ゝ代海ゝゝゝ春ゝゝゝゝ風海ゝゝ
其言ゝ風ゝゝゝゝゝゝ百千京博乃言ゝゝゝゝゝゝ東方言
貴い新宮ゝ中古の言を商ゝ遷ゝる言也西方乃言を流言也
とれゝ中ゝ方法国乃ゝゝゝれ伝言韻乃ゝゝ代おゝ貴ひて言文
ゝゝゝゝ土ゝゝい南ゝ所ゝれゝゝゝゝゝゝふ三千年ゝゝを伝

天下乃音声足らしぬれバ其音も聲ことに成多くしげることゝせ
清濁しも中まのしきさハ二つに常ふ亦文字まゝゆゑにそて音韻の学
のしきさハ常ふそろうち何乃ゆゑふわりて文字音韻等の学れ（西の右しわりまゐりて家ふ方のことはまじ）
ね常ふ亦ゝもあらさまハ之されど天地のゐる本自方音あり家
東方ハ声音のまゝすさこそ声音乃すさふいふまじく 則是ハ天地
発声の音にして天下乃音成合せて其中にはいふまじくしてふ
とめすし清濁ハ其母音之人よりともゑよにて海外の人のこゝろふま
思ぬる二家国の人其ハ詳を沢てするよあらるましてハ彼情を由せ
る事成よくせんきて家方域乃内よわかるておそふ亦のなく
かへさしして足逢るより音ハあまてて声成文謂之音と発為

音ハ之成文為調詞ともいへるハ凡音何乃間声音の本家なる
よみあらそといふりめぬし家国古今の音よおなぜむ音韻の
学よよらむしてゆき然りとむ在しこも都まされ共
云せられぬる師るには呂波といふりの俗に如音五位其字も其文字母凡
五十字唇舌牙歯喉乃音を別ちて男ち縦横相対して相呼ふ法あるやしい
いむし呉の比丘尼対るもりありて出るはしく彼方にいふ之と世ゞ伝ふ
るとかつのあれ音家の学によややうら之文家東方の音を括足しね音あるやうる
おのふ其人彼本土をさりて韓化を経てのち彼篇うれ事もぬらむ音すまる今の新辞
音韻乃学成ニゝする世ありハあすさ市の音にもいゑ之文家西方の人来ありて彼方音成の
よ其字母といふハ三十三字あして天下の音をしそらつまで合しハいはれのすべ彼
人中土の文字多き事を以論して文部へハよく化性語しとそそて色それらの字を
しくハ化してて天下の音をゑ母せしハいし類しき事之家方のしきさハ声ありましくひ
ろう文家和乃方音成あて唇舌牙歯喉乃皆まで曉ありおそまて中喉音のをうふ
音のしきさ家国の人中ふ亦え全くこれ喉音まれあらずありくひうち其喉部とう成
ゞすめへ字亦のしきさ誠に及ぶ彼国の字母をとるニにて三十三字の中二家方の中二家国
此字母ハまず喉音乃皆一行乃五字のこと其字ありて亡字の形も其音よくさとまで音絶
の字形にも文音成りくのとくりして並ま皆家国の音のわるとふかりよあらず誠よ彼地

乃字毎に引くべし或ハ二合三合して二文字
位なるも四段五段なるべし
なるべし其性のよろしきもの多くして
ハ其業をなすべし
永國長の云其業音乃惰とす多くして業を
ハ悪く業自ら其大略乃ち五段五方のなるべし
よりて惰せしとなん
惰せしとなん
濁音を凡ての音に濁あり
濁音をおすべしあり其濁乃後なる急なるよりて其濁
音よりは後急濁濁あり其濁なるハ上濁なるハ下濁なる濁
を濁し後なるハ変せしは半濁を急なるハ変せ
しハ半濁を合して唇舌牙齒喉の名乃ちなるかを
よりて惰なるべしとかなるべし
れ惰して惰なるゆえなる中をなるべしらの類れて方位
よりて其音の惰なる或ハ二合の名或ハ三合の名のごとき
乃音和合するよりて惰して他のなるべしあり凡それの類
業よりこれ其業音の自ら惰なるべし惰して他なる
なり惰なる惰して其濁なるべしあるべしも濁なるべし是
等乃業惰なるべし
姉の字よりなれやとしてなるべしアヒウナなるとなるべし
しかるべしこれ其方なるべしハ世歌ハ美曲也なるべ
其曲乃伝なるべしと言なるべし
くなるべしもなる代々其曲の伝れ代々
とは世乃人々お得なるべしハ古乃法ハ業也ハとなるべ
いひ文惰してヨミもいひなるべし

国立公文書館
National Archives of Japan

抑一切の事

世乃古之式解釈せんとす上略中略下略等の後わるるうつ家わ
小而ハ是也天地乃運古今の変いるごとくに人生乃分
長性大なるごとく古乃時い人の幼なるごとくに成わ云し
事ハ風俗乃変ずるよりて人乃やまとこゝろ壮大なるごと
今世乃式ハ学問乃児戯ニ等しく其一年やまし
ぬるふるひて天地乃ものゝ古之乃略やるごとくなるハ
して変化するごとくしてふのゝ古之乃略やるごとくなるハ
其形之是式略してゝひゝふいわるゝお其わるゝ事ハ
ゝるうぬるゝも亦自らもくなりてもゝ中疏之わるゝ

ハ是式略してゝひゝふいわるゝお其わるゝ事ハ
云のごとく略してゝひゝふいわるゝ是式略して
其上世の云のごとくハ其信蕾也中世乃云ハ其花乃開ゝ
下世乃云ハ其花の烱燦ゝ及云ゝ略してゝふハ其花ゝ
りあて後ゝ油れる之是等乃ハ或ハ一云合て一云ゝなる
いわ或ハ二云を合呼ふりゝ其青式常ゝ上のまゝわるゝ
是等ゝ其略の略せるふれわゝゝ別是ゝ事の略ゝ
ゝ出ゝ油ゝ式紅ゝ緑ゝ赤式ゝ云ゝ紅なるハ赤風
油ゝゝてなれゝ赤緑なるハ青黄乃油ゝてなるる
ハ之赤式略して紅ゝ青式略して緑ゝ云るゝ

其略語乃例ニ略語にハことばを略していはゆる略言といひ云ひ出ることありて云ふ文字を略して
いひ其研を略していふのたぐひいふなる古語に此語ハヒといひしを中ごろよりヒといひしを後にはいひて此を
といひけりヒユとはヒイといふ語の略せしことにて云ふ語を略してヒエといひしなれバこれわろし詳に氷乃ほ
ふ事あり又古語に天の原をといふ語を略してアマノハラといふ語乃中にて乃略
ゆゑとしてイといふ言を略して開の字をハラとよむなり是も其の語を略にいふなり語をアミテといひ
しハ古語に御をミといひしを又古語ハ和名抄を併せて略し古語を略しフミテを云ひて
いひ又スミスリをもいひしをいひしを其中に略乃急にしてフといひてスといふ事をいふ
古代等にも呼びしなるといふハ略言するなれバ是等ハ云語乃略なり然れバ○
ゆゑ其ハ語に略言とハ五音を通はして名にせしなり又略して云ふこと言を略して行す
乃類也といふ是も略して云ふ語を略していふなり是とハ云ふ事なりといふ
さはなく古古神世乃時より更にありそれ乃略ありて五音相通をもつていふなり
あまて名付けるにいひしを略すべしと云ふなりこれを○又反語ともいひ中を略して云ふ
とけるしやなくして略するのあやしいふ古語に皆ハてにいはくして語の略して云ふ
いひしとさハ或ハ方言乃国といひしなりけりてひひしなりやと略していふ語の略して
国といひしなりにハ事ひにてといふにいふハまさにかくいふ古語を略ゆるにけりと
ひろけるといふもしく後くよひし言乃ひとさてキユと略なり○雪をユキといひ
しハ其ハ良く白きをいひしてハ古り詳に云乃ほに見えたり是等の語も並に古古乃
時よりなくいひけり其代乃ことばに切韻乃学問といふ事の起りてや又乃音を反
してユキとなりしキユの音を略してキとなりしユキとなり
事のありつきなきもあり八是等乃説のしくき其世を編める事にも反しする後代の書

代りて古古乃事を説き語の
ハ段ととも似とすべきなり

其云国しく志て二字の事哉に其名国して其ハ物哉なること
と見ゆなりされど是等乃類ハ家国の仮名（カナ）をもて志すし
ぬまでハ其字を定かなるまでもこれを呼ぶにハ字音乃平
上去入に音乃清濁假名にもよりて名自ら相別まで国し
うちなる是も又略語の類其云乃物ぬ事までを略して事ぞ
なしぬるまでを略して是とやなしぬるまでを略しに
あてハ云るべくなるものをなしけて

或説に家国の云に借語乃例なるものを上とも云もの故に借り用ひて名付けるに
目代りて大としニ云語を借て為とせる類なるのもいふを家おいふと語ハ是も又
略語之為にハ火のことき此火と云るしいふものには火と書とも氷と語しつハ是之為もなし
氷を振梅にも霊吉等間並等乃ごとき並りなる古語にも

[illegible]

古云乃義成りしるし古事記乃義成りしるし
小人し事一つも多く古流指遣これ小説国風と成り
中其徴とするりてきりのなるしるを日本紀乃
しるし乃歌中に万葉集乃歌の用ひたるを古く乃歌を
そろへん成潤ひへき事しく仏覚徒師一万葉集乃歌のごとき

其妙解とハ用ひきりのごとくなるこれ仕書り魏志
乃ひしるしるひすとを用ひる事なり
漢字成用ひて成るのもの日本紀を始と
成其字を用ひられしものよりて古云乃義自ら成る
ものもなくなるを日本紀又是成くを乃八れ仕て日
本紀乃文を以日本紀乃なるを今義解り
釋をしるとき本朝小説漢字成れ用ひ法花経
りてきりの最多り侍名抄乃名称仕して其下より
用ひしるし乃文仕りて其義をたちしく仕きを文を
なるこの

漢字を交用ひそめし後ハ彼字を読て侍りけれハ古への
それの事也と後漢の蒼頡となせし彼よりの後自ら
合ねる論をなすもおもへるも或ハ漢字に此間りとも
比相合ふさるもともありとも凡これらの類 [illegible]
て乖謬之といふ之是文不通の論とも云べし
孔子の春秋を傳へし三家乃書を見るに其言ふるせし所との
く其方法わりと見へより示非方云等乃書に見へ
云々も但し古今字乃云ねを用ひしてさういふ事に
して彼字を用ひ是に其義異なるあるを但しこそ
あるにより方の方云に代わるあるを

或とひし銃の字のことき訓ハ字借訓音読訓之といふ之をとは今抗音にして後てカナマリトいふ
其字の本字従ひ抗乃首く従ひぬるとなりし抗乃字のことき樹抵也といふ之をとは船梲と
あるして後もカナといふ其字の本なり従の尾り従ふを見るにもの意と見り
云く彼字を用ゐる訓ハ其義のわかるまで家國乃訛謬之といふには春秋の
三傳ハ云々し赤鼻の流の用ひしなる伝非方云等の書の字の表云へしかと
き彼のしいるしは此れ謬まてなりしいりこいかもとれ彼れ謬まて在くし伝と
其彼ともしなりて彼是を云ひ方云にまるの書れわかる [illegible]
世の人彼よりもて此を非として乖異統謬也といふ通達乃論なれ
わるも或は俗に飲食菓物の類の彼とは俗にて [illegible]
こし [illegible] 世の憂を [illegible]
いふべきも是又 [illegible] 彼といふの方云あるを [illegible]
しより方云すれ [illegible] して来ぬ乃ことさへして [illegible]
いふといふ事乃疑ハ事なるもり何乃愛を [illegible]
書のことさら上ハ来化り始く下ハ貴魚の微なる [illegible]
いふところを [illegible]
せまれ [illegible] 拭き事ハ知る [illegible] 皆漢字を読
て此事ともあもりし小其古訓を訓用しつる
もとむしなりて [illegible] 此事化り離読くにギ

とあるまして　日本紀ニこゝに倭名抄ハ
驚儀ニ云ものゝ　同書揚氏漢語抄ニ云て国名の
字源也　本朝ハ亦同し　日本紀ハ抄漢ニ云とあるを倭
名抄ハ模漢ニ云とあるとき　同書ニ紀日本紀ハ
見ヘ　本紀ニ義解ニ合へ　倭名抄ハ云へし
不知　本據不詳　とあるを人並ニ倭名抄ハ云へし
新ハ　本紀ハ同書ニ紀日本紀ハ云ハ見ハ
遂ニ　同書ニ従ハ　本紀ハ　従ハ　字ハ　従ハ
とあるを　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
土　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

同流ニ漢字の乃音ハ和訓とあるをしるべし
如本紀ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
とも　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
ねと　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
しは　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
云の中　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
音の　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
物　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
い　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
南次濁音　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

乃なき不なのれい呼のゆる事ゆゑ仮名にして別物
にしてそなるもうしとう　唐濁の字虚汗切
羽次清音をもて呼ふへきれとこれも家国なき
事なれしは呼のゆる事なるに全別物也
しかやとなるもしや（濁音にてアテとひらかなる日本紙ふくろう）之仮乃者
のことさも亦これ小国の流れなる濁
仮字の言の始せしのこれもわるふ韓地乃方云乃
始せしにくなるすきくへいたるのはうひ
爾くあとをはしいアてこしとはる韓地乃方
云よりうくワタてもいひり日本紙の新刻り

あ濁清てホタイといふ事のくくしい日本也繁
も朝鮮東国の俗あの呼ひてバタイとふこそふ
りて古を推そる日本紙新刻ホタイさんとふ
或ハボタイ或ハ又ホタイの字紙りてホタイとなりし
もとくくすホとこのひばとふ言のもきハはまふ
なるさ不こ乃ま言いこそる始しそ日タとるさる事
紙ゆて是を寄る其言紙始して呼ひしにわる紙
其音の自ら始しうりる事古紙拾遺ハ書契ニト
字華顔真預問故笑廉識ニ根源ヲトひトハ
徳也家国乃古云其我陳遠失ヒ事漢字行にまて

古文廢せしよりこの事ども多く紛れて
是非論しがたきなり山城と彼字と全容乃分
ものなりこれ国乃云を古のまゝ
乃也海外代公のとくさられ容之漢字の
しよりて其事と合て、加之ならしていつのか
を是もりて彼字はこれなるに
なるも似り古云乃我れも遠きものなるに文
意にそわりなる事こゝにいる彼山樹枝彼
くは彼枝既にもして樹ともりぬるとのては樹れ
きくその根株のわるもも乃ても

りのちあらねばこそしくにて素戔嗚神乃天降り座せし所韓地なるにて出雲にいたる
てあひしといふもののこゝろきこえ本朝乃国史にもしるしおきて文彩羅任那伽羅
わかへてみなありし事ともも神功皇后新羅を征し給ひしよりはなか
ところハ此間乃流出しこゝもはかりし此の言乃ける小倭より来る字図ある百
せまてみ久しき事にて我かくさき古言のうしこゝみ出うつりしも疑ふべき事にも
かりしを而してやう彼のおほ倭ハ来るにおよひて百済乃博士等各其学をもて来り倍
あらん其方言乃けるに流れたりしらくはひにくを彼らも朝鮮乃方言に其の徴とせき
あるハ海をへたて及び其徴ともなへきをなきうつることも古今の風俗にもよく移り易りぬる
彼とたり而して同じ而してや三韓にも真りてひてはなる事即ち及ひくりしは彼古
言乃とくに遺連るもの多かる中にもあらしも流ありて韓地の方言とふまかるへき
ところハ日本紀にみえし
ところみなりしものはくなるべし

漢土の方言韓地の方言なとまじはれるの流となりし例ハあ
にも立てもり又家書の中に其ハ義を釈せしも見へたり
梵語乃此間の語となりし例其一二をいはゞ挙げべし
然るへハ猿をマシラといひ杜鵑をホトヽキスといひ水をアカ

といひ南風をハエといひ果をタツキといひ焼をタクといひ
蜷をカビといひ斑をまたタラといひ曲鉤をハリといひ綱を
テツクリといひ枝をカセツエといひ智をサトシといひ
愚をヲロカといひ堅なるをサカエといひ坐をサカリと
いひ本事なるをサダカといひ本事なるをサダカナラス
といひ類なるを数々あり

マシラハ摩斯吒也ホトヽキスハ別都頓宜也アカハ
阿伽也ハエハ波夜也タツキハ駄都也タクハ陀呵也カヒは
迦毘羅也マタラハ曼陀羅也ハリは波利也テツクリハ沉雄羅也カセツエハ刺竭節也サトシは
薩埵也ヲロカハ阿羅伽也サカエハ遮迦越羅也カリは歌利也サタカハ闍陀伽なり
是等のほか天竺をフラといひ書をエロといひ洲をシヤと
いひ曲をマカルといひ

母をヲモといひ賊をアラといひ玲瓏をエラといふなど
ときは旧事紀古事紀日本紀にも志るされし上世

乃ごとく似たる事しもあまたは世の疑ひとも貽しぬべき

事也されと梵にいふ所と此にいふ所と其趣き兼せ

たるに至ーては彼とひとの相似たる所もあらねと混せ記

所のごとく彼語を取りて此の語とたりも取りよは因

しかしるソラハ素語なり ヒルハ婆樓也ミマハ四摩也フナハ浮囊也ハカリハ佉梨也マルは摩羅也ツカルは摩竭羅婆也ソラ

は阿摩也ユラは吉由羅也

又ある事乃如く俗語にあるは所乃如く悉く

小蟲ハアシ汲 今乃俗にいふ所のごとき二三語あげして例したる也 毎ハコト タンナといふハ檀那也翻して布施といへり 友をヒルヒトとい

ひハア利耶羅也翻して吉友といへり 勢成わるをイカメシといふハ都伽也翻して威猛

といふといへり 癡なるをバカといひ 無智をバカラシといふハ慕何也翻して癡とい

ひ摩訶羅翻して無智といへり 理に叶ふ事なるをスダラナシなどといふハ

修多羅也翻して契経といへり 手重なるをモダラツクなといふハ母陀羅也俗

印手といふ也といへり 判決をサバクといふは婆婆阿也善治といふといへり 瞟眼をヒガメ

鬚髪を除くをスルなといふは周羅也頂の一髻の餘髻皆除くもの也といへり

といふは賓伽羅也翻して相目といふといへり 癡疾の人をカハラモノといふは迦

摩羅也翻して黄病をいふといへり 竊盗をスリといふハ朱利草也翻して賊

といふといへり 死したるをアナハタといふハ阿糅波陀也翻して不生といふといへり

又蜉蝣の類にアサリトいふものは肉舎利の謂といへり 此ものは其味の殊に多

きものに又サモシキヒスシなといふことは俗家自ら称して食乃といふごとし

モは沙門也矣は苾蒭也 是等乃類最多し古の時諸家にも謂ひし所の俗間にも

ここ残を傳へしなれとも見せあへ

ぬなり也し

東雅卷之一

筑後守従五位下源君義撰

天文第一

天アメ義不詳家國古乃代よアメといひし
異語同〳〵にして其義異なるけりアメ亦情
てアマといひ〳〵ハ異例なるを而けりとみえたり
漢字採用ひて天漢てアメとなしアマこなす
よおてい古語し第憶也まるけりとみしけり
天とアメとそひアマこいひし第四義をし而も異流多り
されど　五方の云ひりうりけりかう寸家出の語和出
の寸〳〵けり化方の云ひりたるまるたるうがけりけり
漢梵の書よ也こしし而ともて家出の語と称しるるよ
たるひ　二の似るうけりるも意り当異れ今ふべい
ゆもけり寸けりいふも家出の寸るよりて　異漢と

称すへき也事不詳といふもの後皆これに倣ふへし
アメといひアマといふかことも其義並に詳ならず
國史実録にもみえたれと体言に天をしてアメ
といはしむ天乃おりて高くしてして上なるをもて
天に配してアメといひしことたり其至学の
何かこころあれともてアメともアマともいひしも
みしらる各其義あるをみんとする人
ホの事とも多く家々の書とあるに随たらん
の自ら明かなるへき所なれは其説と考ゆへし
事ともいかすアさまう晴してアメとそいふにてもいふしは
万葉集歌にアマともいひアメともいふなりしとも
たちにいふ時にアメツチともいひアメにいかなる
しかいふこれ世の事也 又久堅のアマツカハラなど
いふ常のことにこといひメといふてもメは同内相
無り及は男ならとえへしアことはまうへし
かくと於是皆相語にいふなる所にこれなる倣ふへし

天 又ソラといひし事は太古乃語也とも
みえすアメといひソラといふ所をいふところ同し

かしは 古事記に太古の初陰陽の二神太伊奘
根といふとして秋津島を生む又名は天御虚空豊秋津
高くて大虚空に翔り 又旧事紀には饒速日尊天磐船に
虚空ミツ日本書紀といふ則是といふものなり 又
古事記に家火に出見尊の此名と天津日高日子
穂々手見命とも又天津日高しれ子虚空津日
高ともいふをしるしたり上古の時事にソラ
といふ語の見えし如く国の語に天とは
てヨホリテといふは則所総羅也すべて上古の語
に其語ありけるといふ説あり天下の云ふまでもな
く彼是の方言と合せてたるは多くの中にも
似たる事ともあるなりこれや天とはアメ
こといひ虚空とはソラといふ事のまた其名とし
いふ所の同しからず前にこそ旧事紀には天御霊豊
ともあるいはれ上古の語にはアメといひしソラと
いふ事の本とされし其徴の明かなる旧事古事記
の紀にみえし所説にかくのことく天の字をよみて
ソラといふは後世によりしなりて何條雁の説に
信すべきに足らず候

日

ヒヒとは靈也上古の時凡物の靈有る故
称して靈乃字を訓てヒとはいふ也同事
記には產靈乃字を訓てムスビとよみ記
古事記には產巢日と書て訓てムスビと
よみ記す故也 古語にムスとは產生義にて
ムスビとは靈之義なれば產靈
の字をもてムスビと產巢の二字を合てムスビと訓
ふにい日の字と靈の字とを重ねて
日の字並訓てリサとよむ事ハ奇也
リシとよむ事ハ情深ふして其義い

靈の字に美有り寸又日時の日八字訓
てカとよむ事ハ初二日ハツカ三日ハミカとよむの類也カとハ
開也明也天既に開き明るとして
アリとよむ事ハ川合をて呼ハカとよむこ
ごとく有る也第と音額乃字に反切の音ありと
へり

譬て漢に月の初二日と言ハ死魄といい
初三日と哉生明なりとよむの事ハ
正朔に用ひ
月ツキ日ハ説に日に次乃第也といふ説事
古事日本記等共に先に生日神次に生

月神ヲトミして又其光粧亜日可以
聚日なるもみてたれば四説のごとく其義に
合つるなり凡上古し語ふつゝいゝゝ
い次之義ゆり配乃義ゆり妻乃字乃下係
又弦月とユミハリヅキといふハ其形乃
ちゝと弦るに似たる謂也亟月とモチヅキ
といふハミチ乃情語なて満月といふなり
四説ともモチツキとふハ日月相望し義也モは
ひふ義也チハ語助にしてふハ日月乃字にお
いてハ其義とたゝしにしてみなモチヅキなるゆへ語
のゆゑ也ゝ接のたゝんにハさもゆゝぬ語
上世ゝ説の説のにハ四説のこゝろハいふ
有へき義也上世の説のまゝ漢字の情ハさ

ゆへなり。

星ホシ係陽二神 月ノ神 月ノ神と生給
ひしゝなりといふ事ハみな星ノ神と生
給ひしゝといふ事ハやゝ次天に雷神ゆう名と
天津麿星といふ亦名ハ天喬ニ背男ゝ
いふゝといふ事ハ四事紀のみなゝ
其義も闕を以古語ノ火と呼じて赤ゝ
いふホシといふ其光の火のゝくなるといふに
似たゝ赤ホシハ刻助し以火をホシといふ
も日といふ説の情をみな

天河アマノガハ義自ノ明也天ゝ河といふな

もとて合ていしゝや芝草のごとく乃
至ハ太古の語ども則しるすべけ
等の類多し

霈 リモ 古語ヨリ黑〻といふ初
ありけりクロといひリリといふハ黑色也
暮とりしといふ 暗とリラと
いふ如ごとく皆是 西業集秋ヨ日の暮
ハ黑〻ものの用ひといふ リレともいふ
此義なり

雲サ敵 あれハ天暗ク
よりてリモといふ〻リロといひリラ
といふリモといふ 即情語也 又天陰とリ

モルといふハ雲生るの消ゆるハ雲に
よりていひしなり乃語也

霞 カスミ 朱詳倭名抄ハ唐韻と引て
日邊赤雲なりと注し以説文ヨ雲日ノ
気相薄ともいへり則晨霞暮霞など
いふ〻ものにてけしきなるもいひ
茜刺 アカネ日とも豊旗雲に入日刺なるもいひ
也今俗ヨアカヤケヤケなるもいふなり
かすこといひ〻ハ赤彩也 業集仁カ
こいひ〻赤ハ義へ〻いひ 赤色とアカ
いふアハ奈流の

初元　カハヤリ〳〵ふかく　其色の火乃
燒くゆめくあるし　ヤクこりいヤケと云　法合て呼
ところ〳〵ヤ〳〵りふ　もまく　けはまこ　俗ハ辰とヤケこふ

日本紀ハ　ハ　彩　濃て　シミこいふい　郎　榮
也　シミこい　記　久こと　いしソこといふ　皆　博
詰　也　西業集の歌ハ深　シミこりいふ

ケフリ　ケトハ　気　也　フリと日　降　氣

烟

降り　補　也

霧

きり　ちくこといふ　又　曇　氣　也　同　說　ハきり

こ日りロ　日　情　詰　也　こりこ　こはりこ　日　歌ハ
等の日　歌　日　ありこりふこ　こりこ　こりこ　日　ロ

日向國風土記ハ昔天孫當しか

高千穗二上之峯ハ天降りこりこ　ハ　ふ　天
暗冥ハこて　夜と別たず　其土蜘蛛二
人が教のまゝに　稲千穗と　ハ　て　物こ
て　投散こ　ハ　こ　日　天　開　晴と　得たり
是にまくて　こ　千穗二上こ　峯こいふ
こ　ちるゆく　其　峯い　郎　今　霧　遇の小嶽こいふ
えのふて　延喜式に　こ　霧　遇　社　從今
其小峯の西に　こ　こ　日　祝の　こ　其　式
相合　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ
紙　演　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ
元日　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ

虹

ニジ　若葉集歟よしノズとうとく八うも
東國の俗のいノジごとしい姫ゑ和名抄ハ
ニジ〻傳むし其語情也其義ハ不詳
若葉集ゑ絲傳てこ〻いふこ〻ハ
卯絲ゑてシハ羽卯しに似〻
暈傳て日月のカサこいふ祥なり

風

カゼ　義未祥　古語ゑサ〻いい亦カザ〻
いい云〻皆是其語の情ぞ〻にて其形義
ハ〻こ山ゆ次同事　紀ゑ陽神胡音と
吹撓し氣化〻て風神ごなれ〻なこいふ
事いみ〻カゼこいふ義のこ〻しハ究次

古語ゑカゼとサこのミいい〻にはれハカこいい〻ハ
上ゑ卯同ハ〻に似〻而若葉抄ゑカ月河の
上の卯し弱ふ〻と カヨハキ〻いい細ふ〻とカボ
ソキこいふのこ〻ハ〻こ山ゆ〻ふセ〻ハ疾也こも
みしゆ迫とセミルこいふも那迫狭り義なり
うハカゼこいふハ其氣のねゆ歩めりゆ〻ふ
事ハ〻ハ〻ハ雷風相薄る〻いい事のこ〻ハ
もしもしゆ〻ハ〻カ〻いい〻ハセの情流なり
疾風とハヤチこいふハ疾速こ義なり
〻の月田事紀ゑ速氣疾風等の字
と用ゐていハヤチ〻月傳ハ〻也俗ゑハヤテ
ハ〻ハ〻田風ハ森こいふハ苦流の
旋毛ゑこ〻ハ〻ゆ巻ツムジこいふ那此也
後俗ツシカセこいいて辻風の字と通ハツムジカセ
こいふツゆ字にムのゆと事いて呼ハ〻ハ心ハ

東とヒンガシといふとちは家園の俗旋情の息（ヒガシといふ文のもうし）
ツムといふ紡織し具よりツムといふ也
何ろえ其旋情し義よりなえし（錘若秋よ錫の字読てツミ）
こいふツムといひツミといふ文字清の情 南ふ暴風とアラシと
いふハ那暴し義之家の俗嵐の字
と読てアラシといふ此字もと山気の蒸
閲といひて迅猛の風といふ事記とこれ梵
語よる偈名秋は猿猫が山風ハ山下より
きる風之といふ説と川てアラシとぞし
又暮風の字と書し漢語秋と川ではや

チ文ノワキノカゼと注ワキハワキといふ
ハニハカ乃情にて那暴風し義也後俗
野分の字を用ひしハ暴風の山より下り
野ハやニ下ロシといひ此しを野分とハノワキ
といふよ似たり

雨

アメ義不詳アメとのといふ書歌後の語
よ似たり日本紀よハ雨の字読てアメフルこ
いふしありアメとハ天水（アメミ）のメといひしを（よメミのニワの書と說ひしとみえ）
しかもとこといふ（義ハ下に記）又日本紀よ雨氷の字
読てヒサメフルといふハヒとは氷也サメ

こはアメといふ語の轉して即是電字
又ホトトアラレといふこゝアラレは散也
逆散の字なり日本紀より散の字淡て
アラシといふ氣是也今俗ホトトヒヨウ
といふ氷雨の字の音にうてよしこゝ
推古紀より大雨河水漂蕩滿宮庭
といふ大雨の字淡字にて火雨とかゝれ
ヒサメより淡字亦其淡と偽て皇極紀の
火雨の字紀もヒサメと淡字にて源頼の博
物記も私記の説として傳名抄乃火雨

の字紀はかゝて淡てヒサメといふこゝ
ムラサメといふ是
公記より是は又暴雨ムラサメといふ是家
國し俗凡物の地にうるおいをムラといふ
暴雨の如く雨地にうるおいかくるゝ
小雨とシグレといふ俗雨に日本紀より
天俗の字淡てヒシケといふヒとは日也
シケとムラの字にうるおいをシケ今も西方に俗
天俗にシグレといふ東國の俗はシケといふ
是等如俗の今も俗に用ゆ遠もの也
ケといふことは又時雨の語也

天漏ヨリて小雨するゆシクレのアメヽい
ふ〜と後ハ小雨とシクレなるいふハ
アメフルといふ事ゆアメ降ることいふなり
さく又雨ふるとニハタツこゝろいふ暴水
也ニハタツミとハニハカの時流也ツハ流雨
小して三ハ水也

露

四ユ義不詳 万葉集抄ハ四ツといふ
水也水の白玉とツ立といふ玉ヽ白色
ゆ立ヽいふ第六宮の詩よみたる ツユとハ
ツヽして白とツヽいふ玉ヽ 粒とツブヽいふも
ツヽいふ園なる第ハ物に似てきり

霜

古刹ヨハ園ツブとりふなり
シモ義不詳 東北ヽ地方ヨてみの雨の
ふいりて雨さしめる雨ふれる雨の末地
かなヽに寒く皆花となるしめるとシラ
ボヽいふものハ霜也シラホとハシモと
いふ淡の時ハ霜たるこ其淡方雨ふれとも
モといヽ其色の白ヽよりといふこ
徴こするハ足ヽ 或説ヨシモとハシム
しむとりふこなるいふいぶりなくふ
なり代開の縁と似ヽ

雪

ユキ義不詳 四説ヨ上古ヽ浩ヨユキ

とりしゝ潔 [illegible] 雪まゝユキ
ゝいふ事も皎 潔之義也 古語よイ
こゝに相 [illegible] 古語よユキ
もいゝかこゝに [illegible] 今キヨ
こりふてゝ之の音と同 [illegible] 化物の名白ふい潔きものゝ
ゝ古語の [illegible] 雪今又ホ
菊ゝの [illegible] 雪とユキ
ケの [illegible] 甚名白ゝ
アハユキ こいふなり 四事記よ日神素
盞嗚神の天に [illegible]
踏堅庭而 隼股若沫雪踏散 [illegible]
こいふ事のゝ [illegible] 日本紀よ其文 [illegible]

左事記よ [illegible] 而もまゝ [illegible] 侍名
枕よ沫雪の字と [illegible] 後てアハユキ
いふ日本紀と [illegible] 其弱如水沫と注
[illegible] 私記の説 萩日本紀よも師説 [illegible]
萩 [illegible] 而亦 [illegible] 世人 [illegible] 説ふ
[illegible] て沫雪 [illegible] 春雪といふ [illegible] 又
[illegible] 初 [illegible] ともいふ [illegible]
万葉集の中 [illegible]
[illegible] 特に [illegible]
[illegible] 梅の花さへつ [illegible]

より雪の降ける世人の流れるとも花とも雪といふべのいたるに雪の初めて花となるとも水沫の結ぶるやうにいひなせる沫雪といひしも古事紀の歌ふ多久夫麻佐夜具賀斯多弖何波（多久夫麻は楮衾也佐夜具とは喧嚣なり何波由岐は即沫雪せば欲須弊理婦人のことなり）其降れる雪のさゑなるといふなるべしうつ和今アウレシ

いふ和ふて降るれいケハラいガシこもるふれなるべ後の人其義を誤解して其弱如沫なるいしるまりて又春の雪の降やすいゆいふ和ふなどもいふるにいなるべしるべ義集よみて欲もいそのいなる人うら古代ものもも遠うる安又説文等ふみたる和ども併うしてみもあるしいとのつるる和ふ義とうるなり（説文は霰は稷霜也）

言雪初作（未成華圓如稷粒也）ごとしたれし雪稷雪とこうるんとは冬にも降れまふも降也にあまるうしいふへれ万葉集のみの雪ともの花とうしたるかの中物とかうらいとうるべ降へ

又雪と雨とうるべ雜降るとミゾレといふ水等

の時語るよりは似て傷名社に雲の字
はなれてミソレといふ
雷
イカツチと只雷のへさの非といふこと
上古の語ふイツチといひしイカシといひし巖
畏の字をしたる同事紀よりは巖の字をて
イヅといふ　日本紀よりは亦漢てイカシ
いふ総いふよい神祇の字漢てカミといひ
しのどふふ神の字漢てカミといひ祇
の字漢てツミといふ山津と非綿津と非
いふしのことしたる也　山津は神名のごとく亦皆山祇の
字なれはしらしたるなり又地

祇の字漢てクニツカミ
こりふしの事也ツミ亦情にてツチと
い如軻過突智神野推神なるいひ
おとしたるなり軻過突智まは加具土とも香来雷ともあり也推は野槌
ともあり　ツチ亦情にてツツといふ般若筒
神底筒神塩筒老翁のごとしつよまる
槌土底土塩土なるいふ乾ふ又雷のな
漢てツチといふ山雷なりて天香山
土百筒真賢木と榊ともいふ火の名と
巌香来雷ともいふ新の名と巌山雷と
といふがごとしこれ　按名の事日本紀日
本紀名よりたる山雷

則山津見神と香来雷ハ
前注ノ如シ

いゝ〜支霹 霹の字とのゝいゝ〜とこと

みしり 又山水土のゝ神其神といひて

イカツチこせ〜のこたもつ 雄略紀に天

皇三諸岳の大蛇と畏しみ恐て

雷とあさし〜こみくれい けはまて畏り

つゝしものと出ふめ尚ほて雷といゝ〜支

俗乃ことくゝ〜〜〜みたる

イカヅチ又はナルカミこもいゝ ナルカミ只鳴神ゝ雷霆の

変化なる称〜 雷霆の

霹靂とカントキあゝいふも

皆是神〜ともて称すの事ツチ〜いふ

乃是に相同〜カントキと只疾雷〜

いゝ如の〜 域説イカヅチ〜い怒し事也

義合ていこもすれ 槌ある人おと撃の義ゝいて

いりこいふこと〜れ〜いゝ〜〜厳し事也ルと

イナビカリ イナ只イカ乃情沼ゝ

曷へふ事ゝヒカリい光也又イナヅルヒ

こもいゝ如ルヒと只出火也又イナツこと

えいふゝ〜これ農家炎早の日小雷西

とて稲の 脳すむ神とたゝ

〜沼やこいふ稲妻〜〜

已上天象

歳　トシ義不詳年乃字と淡し年亦同し
ミ〜亦恃〜てトセともいふ一年とヒトトセと
いふ二年とフタトセといふのごとく是三十年
ひミソチといひし四十年とヨソヂといふが
ごとく此ハトシごとにふことゞ恃〜てシトいふ
シ又恃〜てノチ〜いふ〜あり

月　ツキ正月ムツキ二月キサラキ三月ヤヨヒ
四月ウツキ五月サツキ六月ミナツキ七月
フツキ八月ハツキ九月ナカツキ十月カミナツキ

十一月シモツキ十二月シハス義共に不詳

日の月名太古のいふつたへなるべし次
四事紀は邪神しちサハヘなるべしといふ
事三たびうたれのはこフハ狭蠅の
字とヨミうしてサハヘなり一ツハ五月蠅の
字とヨミ淡む事狭蠅のごとくなるは
上宮太子の説なり五月とうしてサツキと
いふ〜支既よりうの其蝿のごとく
又いふ〜やの字傳説の二神日ノ神
月の神と生まるゝに其月神の邪名

一つにまい月讀ともとゝいふ上古の漢ふ
漢しゝいふ後世ふかゞフルこゝろと
もいやあるもいふ侍る月の故とうそへい
るもむかしかそへいふ和の名なる事なれ拍
つゝ次天地ゝ始て九和の名ふあるまて
後世にいふれのまに上古にいふ和のまゝ
やとも云次古とゝる事の名ゝ有て
世のうつりかわるゝ他ゝ異いふこゝろも
又うつりかわるゝ故ゝにゝで初ゝ月
和名月なゝいふまに後代の歌初め

またかゝ遊ゝ異月名とゝる事の
おゝくたいゝる事ゝ世の人のいふ
和の名は異名ゝるゝて古ふいゝし
こゝろのこゝに初人もるくなるふいたるゝ
五月とサツキゝいゝ又世の人ともるやゝ
ゝしいふ月ゝなともいふゝ月の事ハ
四事記よみ和ふいたの内の名や
ゝこもえゝるゝ　卯月　長月　陽月
歳終なゝいふゝまに漢ふゝ和くいゝ
侍ふゝ和れ月名のまに事国ゝ

漢字借ラレ後ノ人ガ書イテ而ラカ
又ハ誤マリ其名ノ右ニ記シタルモノ
其詳ナル事ヲ考ヘルヲ要ス　疑ヒ疑ヒ疑ヒ
ラフ紀ノ中其ニ云ヒ寄ヲ注シタル四章紀ニハムツキ
コノフ章ニハムツビツキトイフアリ上古ノ清ホスベ
ムツ神ナリトイフ説ムツトムコノヒソイテ
睦月義ナリトモ云ヒ又ムツヒツキ
ツトイフコトニ伝ヒノカヒアリユヘニヒトツノ
モノ名ナリトイフ説モ捨レ難キ
トモ云ヒ難シ　ヒトツノ
イフノコトニ就テモ四ツノ説アリ
単本ノ生ヒ立ツ時ニ成ル月ニシテ
古語ニモサコモキサイトモイヒシ
章ニモ四月ノ其ノ穂ヲ刈ルトイフ
丁卯月ノ其ノ穂ヲ刈ルトイフ詩ノ豳風ニ四月

イフ変ト同ジ月ニ卯月ヲミエシモノトモ
ノアリ周正ノ説ニハ卯月ヲ以テ
シフ至テハ月ト卯月トイフ変ヲ用ヒ
カトイフ変モ用ヒラレ殷ニハ月ト卯月ト
イフ変ハ上巳ト云フ説ヲ考ヘ
旬ノ巳ノ日ト云フ変アリ　晉ノ後ヨリ
巳日ニハ用ヒ始メ三日ト定メ上巳
ウノハナノ咲ク頃ノ月ト云フ説
ノヲ考ヘ出シ
ホハ其中ノウツホ　ウツキ　ウツギ　ウツ
其花ノタマ　卯月ノ花ノ形ニ似タルモノ
ヒラ　ウツキ　サツキ　ウツキ　卯月ノ花ノ形ニ似タルモノ
ヒラ　ウツキ　サツキ　ウツキ　卯月ノ花ノ形ニ似タルモノ
ヒラ　ウツキ　サツキ　ウツキ　卯月ノ花ノ形ニ似タルモノ
ヒラ　ウツキ　サツキ　ウツキ　卯月ノ花ノ形ニ似タルモノ
ヒラ　ウツキ　サツキ　ウツキ　卯月ノ花ノ形ニ似タルモノ
ヒラ　ウツキ　サツキ　ウツキ　卯月ノ花ノ形ニ似タルモノ
ヒラ　ウツキ　サツキ　ウツキ　卯月ノ花ノ形ニ似タルモノ
ヒラ　ウツキ　サツキ　ウツキ　卯月ノ花ノ形ニ似タルモノ
ヒラ　ウツキ　サツキ　ウツキ　卯月ノ花ノ形ニ似タルモノ
ヒラ　ウツキ　サツキ　ウツキ　卯月ノ花ノ形ニ似タルモノ
ヒラ　ウツキ　サツキ　ウツキ　卯月ノ花ノ形ニ似タルモノ
ヒラ　ウツキ　サツキ　ウツキ　卯月ノ花ノ形ニ似タルモノ

フツキといふ事これも　文月の義なるべしともいふ
ミナヅキハツキといふ事ハ月と葉月といふこと
漢にもうつしといふ事これも其事又疑ふべきこと
何にも月　陽月の事ハ漢にもあるべし傍へ
しかし其中　陽月と読てカミナツキといひし
ハカミノツキといひしをいひたるへハ萬葉集
の歌に神無月と書なりと読てカミナヒヤとも
いふことし古語にはノといふハ略してナと
なり事ハいふも有り水上のミナモノカミと
いふへきとミナカミといひ田上のこともタノカミ
といふべきとタナガミといふのことしたる　采月とも
いふべし漢にも晦のくいひし事なりとハ九月
とこういひなれ義ほまてハ十二月といひし事なり其
月ハ異なれと其義と云事ハ相同しきハスとも
覚も漢にも十二月と果絶ていひしかるべく果乃
終りといふとも右説に年とトシこもいひトセとも
いふ又ノチともいひし事なふ何を知れるべく
其チとといひしハトシといふとハいへと情しくて
シとなりシとといふを知るらひ情して千となれり
なりシハスといふの如くシとはシハトシのひとむらひ

略してハスといふハハツといふへスといひツといふ
も其語の略して義也の段に凡事の終りとまた
ハツこともハチごともいふべきされハ萬葉集に極乃字
をこそハツこともいへし借て極月の字と用ひてハスとも
もいふなるべし　閏月の如き古へハノチの
其月といひけり日本紀に閏読てノチといふ
即此也今も俗言には俗其言のまゝ閏読て
ウルフといふ義祥ならず助字とのごときにハ閏の字と用ひて閏となるべし
ごみもたりうるハ閏とウルフといひしハ閏の訓にやあらむしからなし

日

ヒチ支エトヒヨミエと読兄弟也甲と木
兄といひて既に木の兄といふことまた其餘皆
是に同し　ヒヨミと読日読也　古語に凡

とかゝるゝと続むゝいゝる廣ハとコヨミ
あゝいふもしは義なる弧はゝいゝ丑とウシ
こいふのもとしたハナ青屋乃為と呼むゝ
又朔とツイタチゝいふを朔立也京畿の俗
化事の始とタツゝいふ立春立秋共書
たつ秋たつゝいふゝ是也 二日ハ
ツカゝいゝ三日と三カゝいふ五日ハ
ゝ五日ハ秋どかゝへいふ カゝいふ義ハ
京日ハモチノヒといぬゝ満月ハ
モチツキこいふこゝ 西月の義ハ前の月
の條ゝ

晦日とツゴモリと云ハ月隠也 古語ニコモ
レとゝいゝ隠之義ゝ此夜月晦なしハ
かゝいゝ

時

トキ 義不詳トキ亦情ゝてツキともい
ゝツカこもいふアカツキハアカツキといい
曉也 時の名ハツカノマト云ゝこゝ也ゝ
歳時月日こいふ事のこゝ也古の時事
ゝゝものこゝに果ゝゝのみゝハ法
陽二神蛭児と生ゝ三果まて脚
立ゝ四事紀よみゝゝ如なゝ個

は皆い富言小むしと日本紀私記な
いみそうは外四事紀古事紀等ふ素
戔烏神大年神と生こうい大年神
那年神羽山神等と生こうその羽山
ノ神又若年神と生こうるすみ
なうもう春夏秋冬にワの時とトキとい
しこうはいまうこうあ月日の神ふ前よみたれい実にもうこう
其年こいい時といふ年のどしすでに闕め
也ハこうる其詳なる事ハいまうへうす采

漬てトシといい時漬てトキといふうのシ
ろいひキろいふろこれ物語すて又ろ
いいツト高も結語ス月といキろいふる
日ふツグの宝也ろみたり又常といて
トコこもいいトキともいふ其コトいいキ
こいふも又物語也凡采 時月日こいふ
事ハ日と漬て月とうり月と漬て時ろ
ろり時と横ル歳こうり歳々相副ルて
古こうろこと形ろ也切美世の常ろこ西
也其いふ云ろこいいツキろいひ

トキ〻いひトシまいふのごとくに五節ふ
相情してまふトコロトキをもいひ
ものゝ寸一日の辰時より始て一年の
節時とも世の常ものゆも共ふこれ
トキこいひしまいふまも其間をへふなり
ゝへて是等の異儒れてみすかゝ
春 八九
夏 ナツ
秋 アキ
冬 フユ 並に義不詳四時の名古の時ゝ

みそし事ハ日事古事日本紀等に陽陽
の二神大倭豊秋津洲と生ふ亦名
い大和霊宮豊秋津根別といふとも是
秋とりふ名の始てしも所ゝ是ハ後
世に名付しものといへ私記流
徴とすへふるもうす又二神ともに速秋津
産速秋津姫の神と生ふ陽神雄秋
日神と生ふ陰神延喜式
の祝詞よい速秋津姫の名と速開都咩
ことゝ書さしハ是も漢字と倩用いら

也〳〵対其結ぶまゝ和同〳〵なる秋の面と
月〳〵の〳〵に真実い春秋〳〵秋とりふ美
よいこゝろ〳〵もあるへ〳〵日に〳〵美秋
の秋の事をみるい日本紀古事紀等
の紀は日神天熊大人命葦原中国の
稲種とり〳〵めるひ始て天狭田長田を強
多〳〵に真秋無穎八握莫然〳〵日事
紀は素戔嗚尊〳〵なる秋乃
事之乃真後素戔嗚神の御孫羽山戸
神の子に若年神夏高津日神女神夏

秋沼女神多〳〵年神等の〳〵日本紀は
みな〳〵多の字を誤写〳〵あるとして
又日事紀は思兼神ノ兄表春命と
是も真秋の表也〳〵多の真字
借用〳〵〳〵やる祥は等の名は美既
は顕明〳〵を〳〵いふも矣ふ〳〵
也も〳〵古法の類例よりて真美と雅求
ゆ〳〵ふ古語はいりこ〳〵を顕也
春の名は〳〵いふ〳〵年風ぬるの美ふて
たゝへい風蔵ふ〳〵いふが〳〵秋夏〳〵

熱ヒアツとナツとしいふ情語にて
其炎熱の時といふ事なり古語ふアキ
こいしこと引速秋津姫まる速開
都咩こと云ふ例よりて見も開
の義りやあるを義不詳又四事
紀ヨ飽咲之宇斯能神とふ今したり
さ北を百穀既て成りて飽すの義に
をやつるを源説て ヲキウこと云ふ
ヲホキウこともいふ海原説てアヲ
ウナバラとふとヲホウナバラともいふよ

らハアキこハヲキの情語よて大の義
小をや省へふさ百穀既ヨ成り
をて其対比する心日神華系中
國豊葦系千秋長五百秋瑞
穂出のたまもけ第多ハ
冷ヒヒエといいてフユとふ
語の情ヒ其ヲ空冷し時ありとふ
其ハ第ハ第の第ハ
ヒ知ハ引いしもりとりいしこ秋ハ第
末の第ハ引ハ時ありハ
第末のもりもと第ハ説ハ
ふとしたとふ田と耕可
とハルとふとしたとふ又第末の英ぐら

[illegible]

朝

暮

アサ

リレ　朝　アサ　ごいふハアサハ開也日本紀歌ヨ開

の字ヨミテアサトいふ

天開　ふ　ら　る　を

いふ字アシタメごいふを万葉集抄ヨ古

語ヨシタメトいふハ間ごいふ云ごいふ也

さうハアケシホドのごいふ如ヨ暮リレ

ごいふをリレヨ暗也天晷ヨ暗ヨ成いふ

也又ユフベごいふヨユフハ夜ヨい

如ヨしの情也ヘハ清明ヨ

晝

ヒル

夜

日晝ヒルトいふヒハ日也ルハ語助也

日の中すの字なるべし夜ヨとよびヨル

こいふヨとハ今日と明るとの中なる

を古語よ也年の節偈の中なるを

さしてヨとよいひ夜とヨとよびて

前世どサキノヨといひ後世とノチノ

ヨなどいふのたとへハ竹節の

なるをいひてヨといふのヨルとよぶ

春

ヨルとハ語助也霄ヨとよぶ

夜

ハヨとハ夜ことハ間也古語に

ヒといひしにハ間の義なり日本紀なる間の字をよみて

ひといふ那比也同亦清てヒマト曉アカツキと云

又はあり

ハ間也トキとハ時也天間を明るの

時といふ今朝とケサといふ今日とケフ

今年とコトシとよぶ今夜とコヨヒといふ

いふをコノアサとケフといふをコノヒとケフ

いひキノフとよぶ書しいた語よ

時とハ去年とコゾとよいひこゾとよ

いひキゾといふをいとともに語助

ゾとハ前日とヨトツイとよいひ

コゾの前年とヨトシとよぶのこと紀ヨトとよぶ

ハヨナセ去れ年の義さこ古語小義と

いてヲチこもいふチもいふテもいも
トもいふ皆情語ヲトツヒトツふツハ語助ヲ
後ふヲ即ハヒトもいふ情語又明日トアスもいふ
ハアハ間ヲスもいふ情語ヲアキリこいふリも
なし今夜の明を明日トふアスノツリと
アサテもいふを明日サテもいテハ助
語ヲ明ヲ日もいふヲもいふその日と

古　イニシへ

今　イマ　イニシもは往ヘもい語助ヲ春色多色

ヲもいふこと　来ヲもいふこと又昔

況ムカシもいふハムもいふこと

ムこいひこもいふも情語ヲ今イマ

古語ハウこもいひヲ日本紀イ

いヲウこいふを情語ヲたもへも黒板

イヲこもウヲこもいふヲもいふ

いひウこもいふ義のもいを並ヲ不

詳イ付数語乃行ヲ語にを目とこ

ていひしヲ

已上歳時

寛暦八年四月七日一技之　橋彦

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan